東條遺跡

長野県千曲市

東　條　遺　跡

— 国道18号バイパス代替地（上町団地）建設工事に伴う発掘調査報告 —

二〇〇六

2006

千曲市教育委員会

千曲市教育委員会

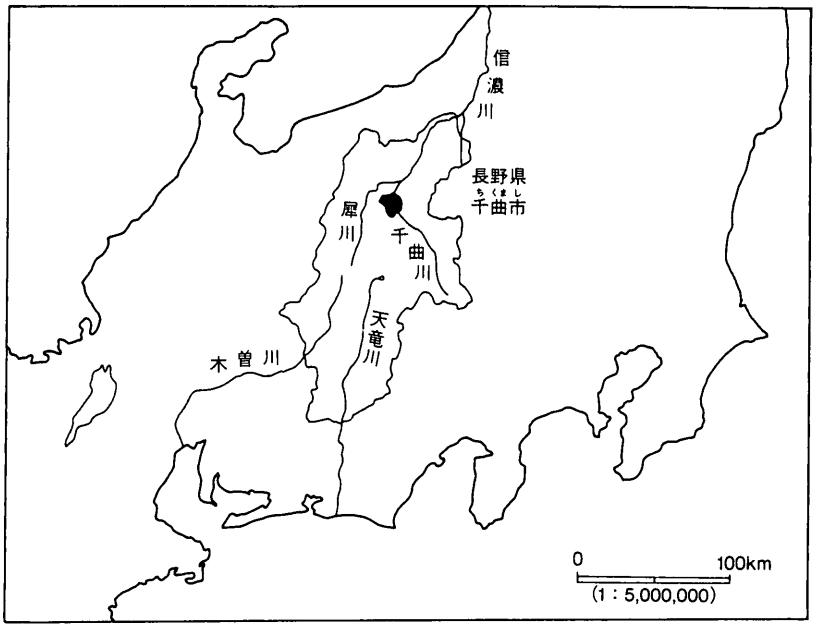
長野県千曲市

東　條　遺　跡

―国道18号バイパス代替地（上町団地）建設工事に伴う発掘調査報告―

2006

千曲市教育委員会



千曲市の位置

例　　言

1　本書は、平成16年度に実施した国道18号バイパス代替地（上町団地）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本書の執筆・編集は寺島孝典が行った。

3　調査は、千曲市教育委員会生涯学習課が主体となり、文化財係が担当した。

千曲市教育委員会事務局

教育長	安西嗣宜
教育部長	西澤秀文(平成16年度)
	塚田保隆(平成17年度)
生涯学習課長	島谷正行(平成16年度)
	黒岩　修(平成17年度)
文化財係長	矢島宏雄
文化財係	小野紀男・寺島孝典

4　本文中の遺構及び遺物の実測図の縮尺は原則的に、下記のとおりである。

住居跡実測図　1：60

カマド・遺物出土状況実測図　1：20

土器実測図　1：4　　玉類実測図　1：1

5　本文中の遺物の実測図についての表現は下記のとおりである。

土師器　断面＝白抜き　黒色処理＝ドット

須恵器　断面＝塗り潰し

灰釉陶器　断面＝ドット

6　本書中の図版の座標地及び方位は、平面直角座標系第Ⅷ系（日本測地系）で示している。

7　調査によって出土した遺物のほか、実測図・写真等すべての資料は、千曲市教育委員会で保管している。

なお、出土遺物には調査記号（HGJ）を付し、保管している。

目　　次

例言・目次……1
第1章　調査の概要……2
第2章　遺跡の環境……4
第3章　遺構と遺物……5
　第1節　調査方法と遺跡の概要……5
　第2節　基本層序……6
　第3節　竪穴住居……9
　第4節　土坑・その他の遺構と遺物……16
第4章　まとめ……22
写真図版
報告書抄録

第１章　調査の概要

国道18号線は長野県東北部の大動脈であり、常時交通量の多い幹線道路となっている。そのため、国道18号線沿いには主要市街地が切れ目なく存在し、特に上田市から長野市に至る各所では慢性的な交通渋滞を招いていることから、早くからバイパスの建設が計画されていた。

軽井沢町から上田市にかけては、浅間サンラインも含め既に整備がされ市街地での交通渋滞は緩和されてきているが、上田市から長野市南部までの区間では、一部で工事が進められ供用開始となっている部分もあるものの、未だ事業着手にも至っていない箇所も少なくない。

千曲市八幡地区の国道18号バイパス（坂城更埴バイパス）建設工事関連の発掘調査については長野県埋蔵文化財センターにより実施されており、社宮司遺跡や峯謡坂遺跡、東中曽根遺跡など多くの遺跡が調査され、東條遺跡については今後も継続調査される予定である。

今回の調査は、国道18号バイパスの計画路線内となってしまった家屋等の代替地としての宅地造成工事が主たる原因であるが、宅地となる部分については盛土によるため、造成工事に伴う埋蔵文化財への影響はないことから発掘調査の対象とはせず、バイパスへ接続する新規道路建設部分のみを保護対象とした。

平成16年８月31日に文化財保護法に基づく第57条の通知が提出され、発掘調査が必要な旨、回答を行った。

発掘調査は９月29日に着手し、11月26日に現場におけるすべての作業を終了したが、調査により掘削が深部にまで達したことから、掘削した現状の土での埋め戻しでは地盤が軟弱となってしまい、後の道路建設工事に支障をきたすとして、12月２日から山砕を転圧しながら埋め戻しを行い、12月７日完了した。

1	調査遺跡名	東條遺跡（千曲市遺跡台帳 No. 118　調査記号 HGJ）
2	所　在　地	千曲市大字八幡字東條3928番地８　ほか
3	土地所有者	千曲市土地開発公社
4	調 査 原 因	国道18号バイパス代替地（上町団地）建設工事
5	事業委託者	千曲市長　宮坂博敏（建設部建設課）
6	調査の内容	発掘調査　433㎡
7	調 査 期 間	発掘調査　平成16年９月29日～平成16年11月26日
		整理調査　平成16年12月１日～平成18年３月31日
8	調 査 費 用	平成16年度　5,199,724円（発掘調査・整理調査）
		平成17年度　598,755円（整理調査・報告書）
9	調査主体者	千曲市教育委員会
	事　務　局	生涯学習課文化財係
	調査担当者	文化財係　寺島孝典
	調査参加者	今井せつ子・落合孝市・高野貞子・中村文恵・西野入金己・日詰利貞 米沢須美子

10　種別・時期　　集落跡　古墳時代後期・平安時代
　　水田跡　中世
11　検出遺構　　竪穴住居跡５棟・土坑６基・溝跡１基・水田跡１面・ピット９基
12　出土遺物　　土器片・玉類　古墳時代～中世　　コンテナ８箱

調査日誌【平成16年】

９月29日(水)　南調査区表土掘削開始。
９月30日(木)　プレハブ・トイレ・発掘機材搬入。
10月１日(金)　南調査区遺構検出作業開始。
　　中世水田跡検出。
10月14日(木)　土層断面図、平面図作成。
10月15日(金)　基準点測量。北調査区表土掘削。
10月20日(水)　台風23号の大雨により作業中止。
　　市内各所で甚大な被害がでる。
10月21日(木)　調査区壁崩落、水没。終日排水及び崩落土砂除去作業。(～25日)
10月26日(火)　遺構検出作業。
10月27日(水)　１号住居跡掘り下げ。
10月29日(金)　２・３号住居跡掘り下げ。
11月２日(火)　１号住居跡写真撮影。３号住居跡より滑石製玉出土。
11月４日(木)　北調査区遺構検出状況写真撮影。
　　３号住居跡集石写真撮影。
11月５日(金)　３号住居跡内集石実測。
　　２号住居跡集石写真撮影。
11月10日(水)　２号住居跡写真撮影。
　　北調査区南半遺構検出作業。
11月13日(土)　現場説明会開催。見学者60名。
11月16日(火)　４号住居跡掘り下げ。
　　３・４号住居跡写真撮影。
11月19日(金)　５号住居跡掘り下げ。
11月25日(木)　南調査区埋め戻し。
11月26日(金)　５号住居跡遺構測量、写真撮影。
　　機材撤収。本日をもって現場における発掘作業を終了する。
12月２日(木)　山砕による北調査区の埋め戻し開始。
12月７日(火)　埋め戻し完了。

南調査区表土掘削状況

台風23号による現場水没

11月13日現場説明会

第２章　遺跡の環境

東條遺跡は長野県千曲市大字八幡字東條地籍に所在し、北緯36度30分24秒、東経138度06分26秒、海抜370m付近に位置する。冠着山や国の名勝「姨捨（田毎の月）」を仰ぎ見る場所で、姨捨から千曲川へと下る傾斜地に立地している。

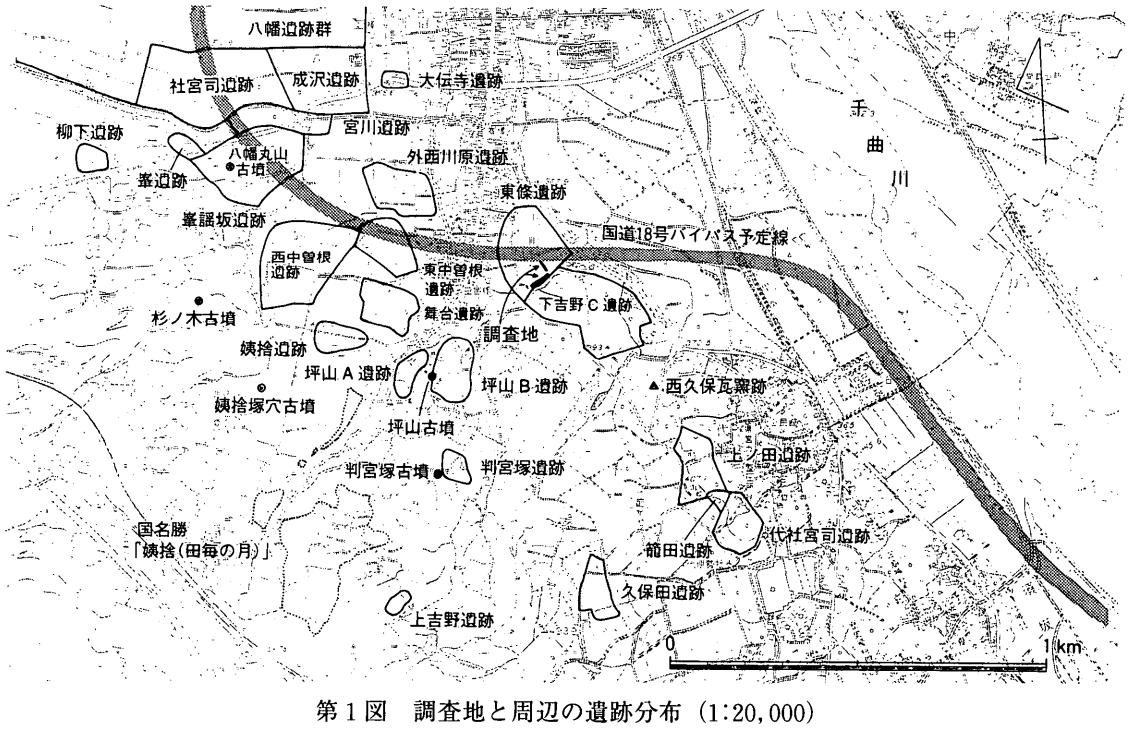
当該地周辺の地形の形成については、いわゆる姨捨土石流が深く関わっているとされ、北は宮川付近、南は芝原地籍付近までの広範囲に及ぶもので、この土石流台地上には多くの遺跡が点在している。

東條遺跡もこの姨捨土石流によって形成された台地上の末端部に立地する遺跡で、弥生時代から平安時代の集落遺跡として周知されている。遺跡の東側は３m～４mの落差をもつ低地となり、さらに600m東方には千曲川が流れている状況は、さながら河岸段丘のような様相を呈し、代集落から上町集落までの間では低地との比高差を明瞭に観察することができる。

なおこの低地部分については、国道18号バイパス建設に先立って長野県埋蔵文化財センターにより試掘調査が実施されているが遺跡は発見されていない。

姨捨土石流による当該地周辺への土砂の堆積は今から約3,000年前に終息したと考えられている。東條遺跡のほか西中曽根遺跡や外西川原遺跡など姨捨土石流台地末端部に立地する遺跡は、弥生時代以降各時代にわたり集落が営まれており、周辺での土地の流動は既に治まっていたこととなるが、東條遺跡のほぼ全域にわたって人頭大から拳大の礫が多量に出土し、遺物包含層内や遺構の覆土内に普遍的に存在している。

遺跡の東側が千曲川の氾濫による低湿地とすれば、そこからの人為的な搬入も考慮しなくてはならないが、そのあり方から、意図して持ち込んだというよりは、むしろ自然流入の可能性を考えるほうが妥当のように思われる。よって、地形を大きく変化させるような土石流であったかどうかは別にしても、縄文時代晩期以降も姨捨からの土砂の流出は発生していたと考えてもよさそうである。



第１図　調査地と周辺の遺跡分布（1:20,000）

第３章　遺構と遺物

第１節　調査方法と遺跡の概要

東條遺跡は弥生時代から平安時代の集落遺跡として周知されており、長野県埋蔵文化財センター（以下　県埋文センター）が実施した国道18号バイパス建設工事に伴う当該遺跡の発掘調査においても古墳時代後期から平安時代の住居跡等多くの遺構が検出され、多量の遺物が出土しているため、今回の調査においても同様の状況であることが当初から予想されていた。

今回調査対象とした新設道路は宅地部分を囲むように建設されるため、調査区の平面形はＬ字状となる。工事工程の関係からＬ字の角部分を境に調査を分割することとなり、便宜的に［南調査区］と［北調査区］とに区別し、南調査区から調査を開始した。

南調査区の調査

南調査区は兎沢川沿いに北東方向へ傾斜する地形となり最上部と最下部の比高差は約４ｍを測る。県埋文センター調査地点から最も遠い場所となることから埋蔵文化財の包蔵状況を確認するため、調査に先立ち２箇所に試掘坑を設けて遺跡の有無を確認した。

地表下約30cmの粘質土内から内耳鍋の底部破片が出土したことから、この深さで中世の遺構面が捉えられるものと判断し、この粘質土を遺構確認面として調査を開始した。

粘質土は粒子の粗い砂に被覆されており、この粗砂を取り除くと畦畔状の高まりや凹凸等が検出されたため中世水田跡と認識した。しかし遺構面が現地表から浅いため、現水田の耕作による削平や暗渠排水の構築などにより遺構の大半が破壊を受けており、一部のみが調査できたにすぎない。またその下層は僅かな礫層を挟んで２ｍ以上にわたって粘土が堆積し遺物の確認もできなかったことから、これ以上の調査は不要と判断し、南調査区での調査を終了した。

北調査区の調査

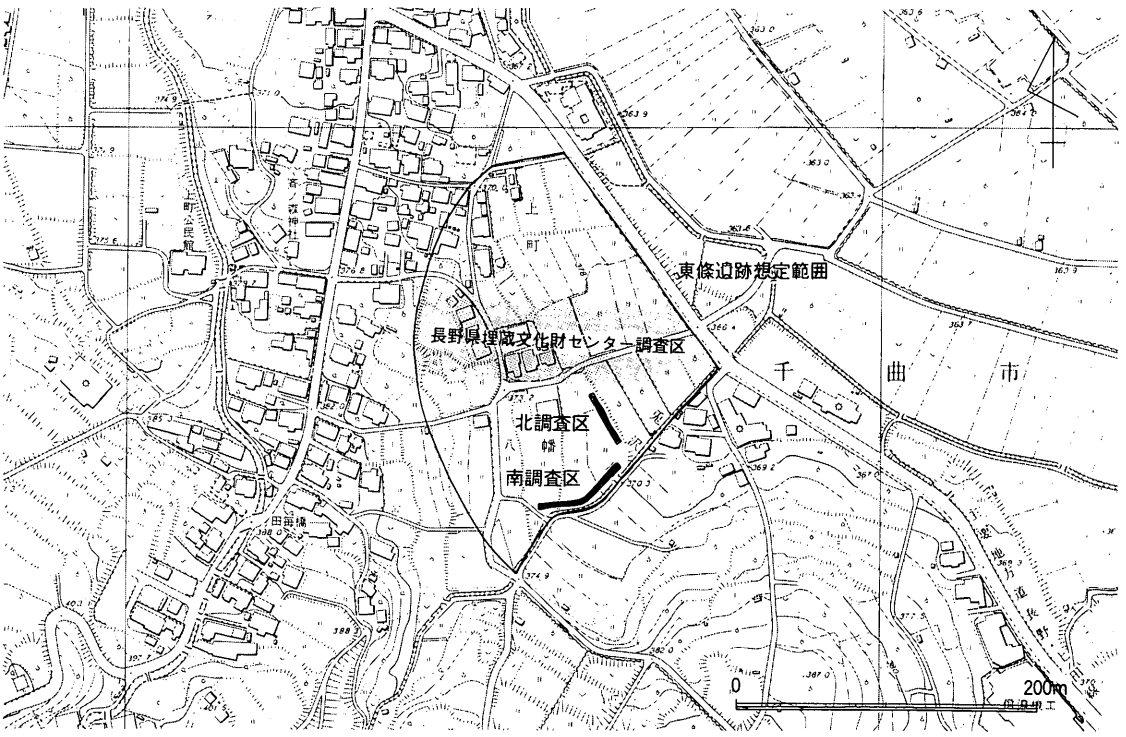
北調査区は県埋文センター調査地点の隣接地となる。

地表下１ｍ程で古墳時代から平安時代の遺物包含層が確認され、その下層が茶褐色の粘質土であり、これを遺構確認面として設定し調査を開始した。

当初、この遺構確認面までバックホーにより掘削を行う予定であったが、遺物包含層内から多くの遺物が出土したため遺物包含層上面で掘削を止め、残りは手作業による掘り下げを行いながら遺構を検出することとした。また、当該地は湧水が激しかったため、調査区壁際に排水のためのトレンチを設け、同時に土層観察による遺構確認も並行して行った。

しかしながら、遺物包含層内には礫が多く混ざっており、いたるところから時代の異なる遺物が出土し、さらに多量の湧水により遺構の有無を把握することは困難であった。よって、遺物包含層内で平面的に遺構を確認することはできず、結果的には遺物包含層の下層に設定した遺構確認面まで下げなければ遺構の検出することはできなかった。

検出された遺構は、古墳時代後期から平安時代の竪穴住居跡５軒、土坑６基、溝跡１基のほか、時期不明のピット９基である。また、奈良時代の遺物も出土しており、遺物包含層内に遺構が構築されていた可能性も考えられる。



第２図　調査地位置図（1:5,000）

第２節　基本層序

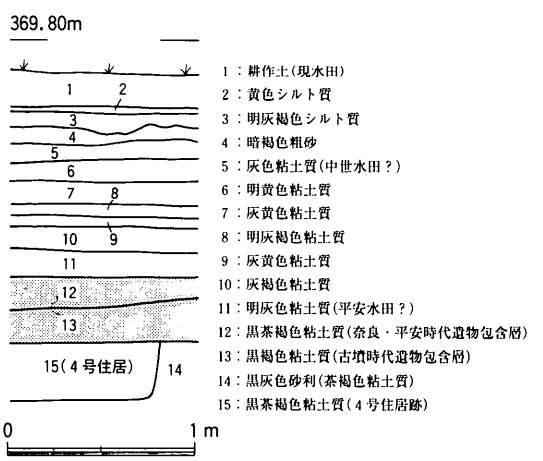
隣接する県埋文センターの調査成果により当該地の基本層序が明らかとなっており、調査に際して内部の状況をある程度把握して臨むことができた。しかしながら、前節でも述べたとおり南調査区は傾斜地にあり、最上部と北調査区とでは現地表の比高差が約４ｍとなるため、遺跡内において土砂の堆積状況が異なる可能性があるとして、最上部と最下部の２箇所に試掘坑を設けた。

結果、最下部の試掘坑で中世の水田跡と考えられる粘質土が僅かに検出されたのみで、その下層は２ｍ以上にわたって遺物を含まない粘質土が堆積し、県埋文センター調査の基本層序とは明らかに状況を異にしたものであった。そこで当該遺跡の性格を鑑み、北調査区での堆積状況を基本とした。

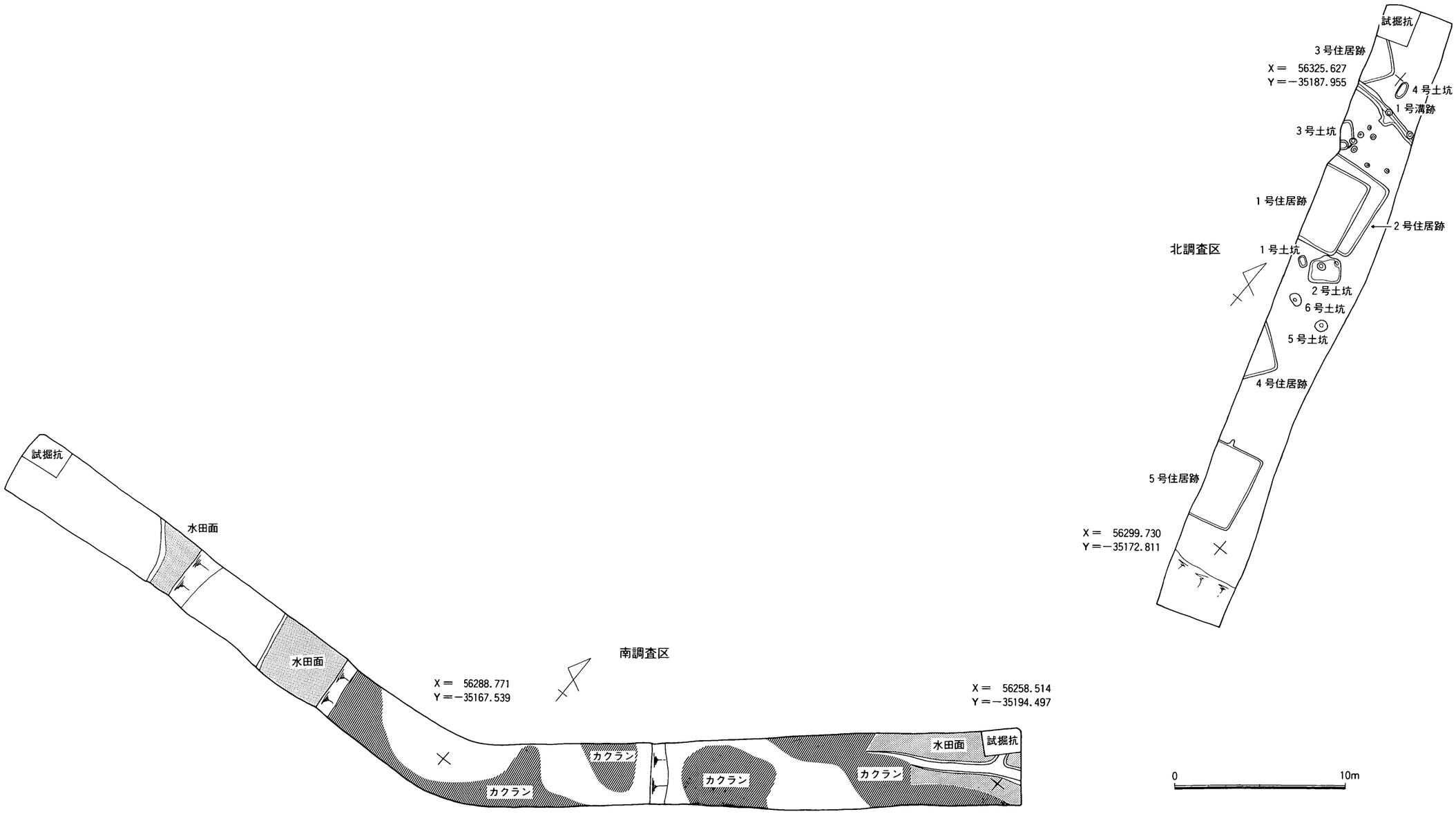
第５層は中世の水田跡と考えられるものの、水田面は畦畔も確認できないほどの撹乱を受けている。第11層は平安時代水田跡の可能性が考えられるが、掘削を開始した北調査区北側ではこの層は確認されておらず、掘削終了後の調査区中ほどの土層観察において検出できたものである。畦畔等の水田に関する遺構は、断面では観察されていない。

第12層及び第13層は遺物包含層で、第12層からは奈良時代を含む平安時代の遺物が、第13層からは古墳時代の遺物がそれぞれ出土し、拳大から人頭大ほどの礫が普遍的に混入している。

なお、第14層は遺構確認面とした層であるが、北側では茶褐色の粘質土であったものが、２号住居跡の南付近から黒灰色の砂利へと変化している。



第３図　基本層序（1:40）


試掘抗
3号住居跡
X＝ 56325.627
Y＝－35187.955
4号土坑
1号溝跡
3号土坑
1号住居跡
2号住居跡
北調査区
1号土坑
2号土坑
6号土坑
5号土坑
4号住居跡
5号住居跡
X＝ 56299.730
Y＝－35172.811
試掘抗
水田面
水田面
南調査区
X＝ 56288.771
Y＝－35167.539
X＝ 56258.514
Y＝－35194.497
カクラン
カクラン
カクラン
カクラン
水田面
試掘抗
0
10m

第4図　全体図（1:250）

第３節　竪穴住居

１号住居跡

規模：4.85m×—　　**平面形**：方形

主軸方向：N—６°—W

時期：平安時代

覆土：黒灰色粘質土でかなり強い粘りがある

床面：軟弱

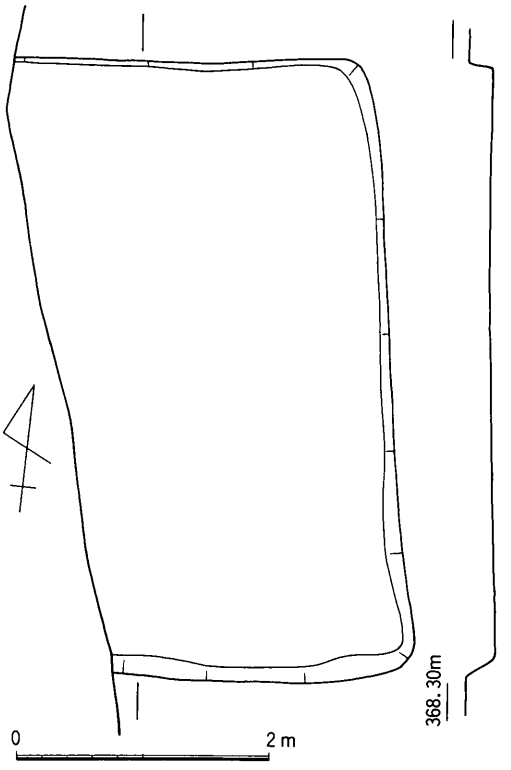
壁：住居西側のみが調査区域外により未検出

カマド：調査範囲内において未検出

柱穴：未検出

調査状況：当該住居周辺は遺物包含層からの掘り下げにより、夥しい量の遺物が出土した地点であり、事前のトレンチ調査において複数の遺構があるものと判断していた。

掘り下げを進めるにつれ、古墳時代の遺物が出土する場所と、平安時代の遺物が出土する場所とが区別でき、さらに、周りの土よりかなり粘りの強い方形の落ち込みが確認できたため住居跡と判断した。



第５図　１号住居跡（1:60）

２号住居跡と重複関係にあり、２号住居跡を破壊して構築する。

カマドや柱穴等内部施設は確認されなかったが、カマドについては西側に構築されているものと判断する。

出土遺物：土師器坏（１～６）、土師器盤（７・８）、須恵器坏（９～20）、灰釉陶器椀（21・22）、土師器甕（23～26）、土師器壺？（27）が出土している。

土師器の坏と盤については、普遍的に内面が黒色処理されている。遺物表面の磨耗が著しく、ヘラミガキが観察できる土器は、図化できなかった破片資料も含め僅かである。１のみ黒色処理はされない。また、底部はいずれも糸切りにより切断されているが、３は糸切りによる切断後、ヘラケズリにより底部の調整を行っている。

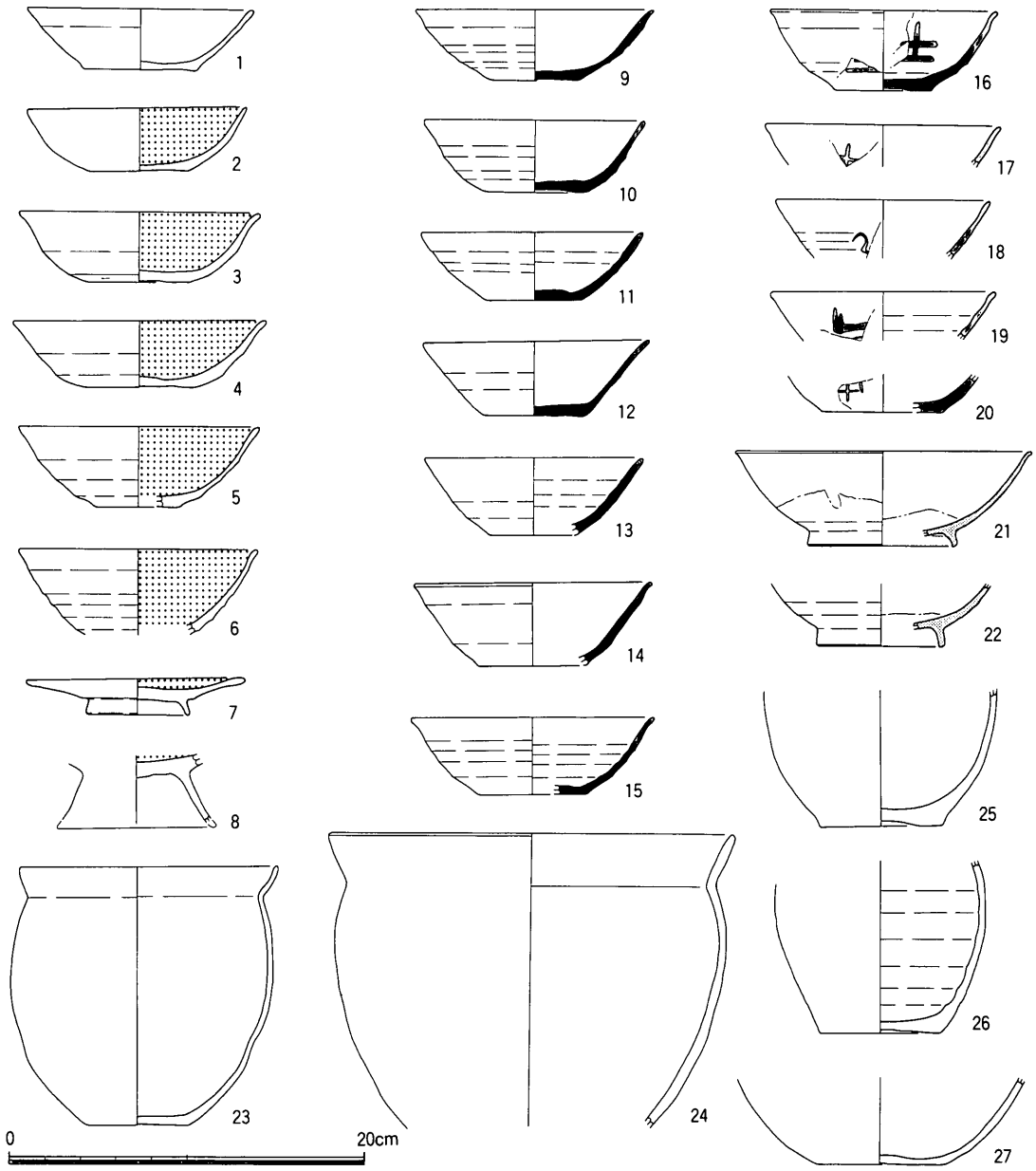
８は長脚の高台を持つ底部破片で、その形状から盤の脚部とした。

須恵器の坏のうち16～20はいわゆる墨書土器であるが、すべて破片資料なため文字全体を判読できるものはない。

16が内面と外面にそれぞれ書かれており、内面の墨書については「土」あるいは「士」、または「干」とも読むことができ、外面の墨書についても同様と思われる。残りの５点については判読不可能であり、特に19については字として認識できるものではない。

灰釉陶器は図化した２点のほか、破片が７点出土しているが、接合関係はなくすべて違う個体である。21の釉薬は内外面ともに刷毛により施釉され、22は自然釉の付着が僅かに見えるだけである。

出土土器の様相から、９世紀後半から10世紀初頭の住居跡であると判断する。



第６図　１号住居跡出土遺物（1：４）

２号住居跡

規模：4.98m×―　　**平面形**：方形　　**主軸方向**：E　　**時期**：古墳時代後期

覆土：黒褐色粘質土　礫が多量に混入　　**床面**：中央付近に堅緻な床

壁：住居西側のみが調査区域外により未検出　　**カマド**：東壁中央に石組みにより構築

柱穴：４基

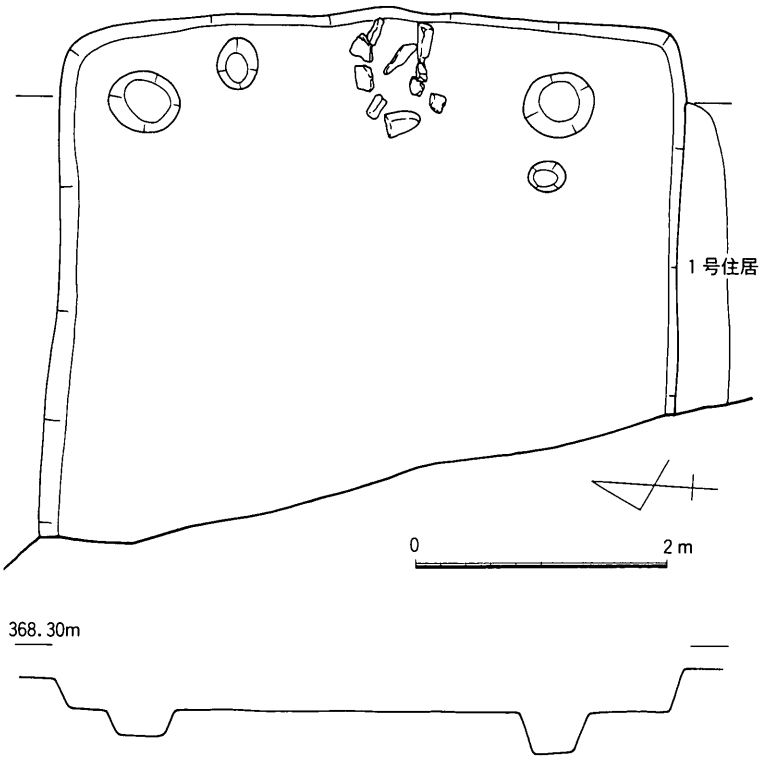
調査状況：１号住居跡がほぼ同じ場所へ同等規模で構築されているが、南壁が一部破壊されている以外は床面も含め良好に検出できた。

カマドは東壁中央付近に石を用いて構築されている。火床や煙道などは確認できなかったが、周辺から土器が多く出土している。

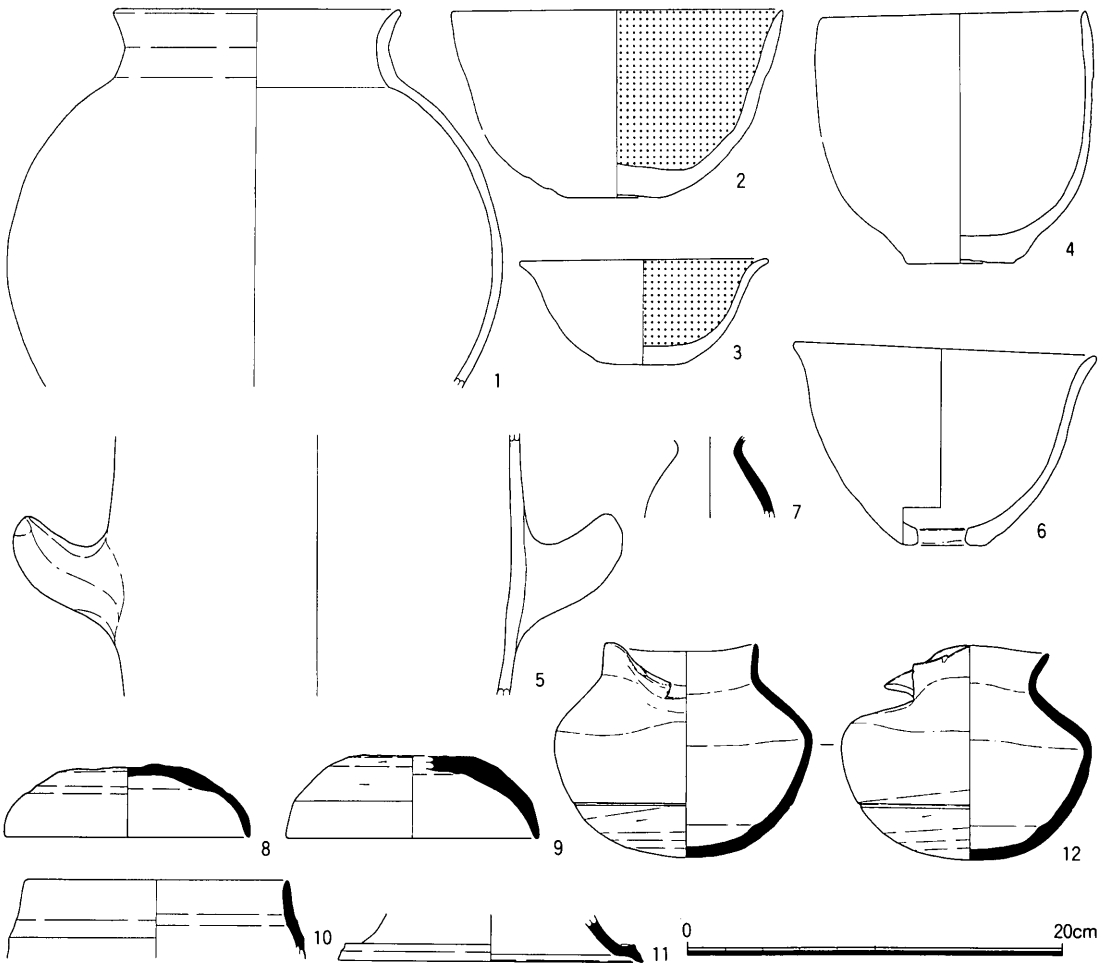
床面に掘り込まれた穴は４基確認されているが、柱穴となり得るものは断面図に示した北東隅と南東隅の２基である。

出土遺物：土師器壺(1)、土師器椀（2・4)、土師器鉢(3)、土師器甑（5・6)、須恵器蓋（8・9)、須恵器壺(10・12)が出土しており、壺型を呈する器種不明須恵器(7)、須恵器脚部(11)がある。

2・3は内面が黒色処理され、後にヘラミガキを施す。6の甑は鉢型を呈し、底部に直径2.5cmの孔が1つ穿たれている。12は短頸壺で、カマドの左脇から出土した。口縁部に欠損があるがほぼ完形で、胴部下半に1本の沈線があり、その下から底部にかけてヘラケズリされる。



第7図　2号住居跡（1:60）



第8図　2号住居跡出土遺物（1:4）

3号住居跡

規模：不明　　**平面形**：方形

主軸方向：N—53°—E

時期：古墳時代後期

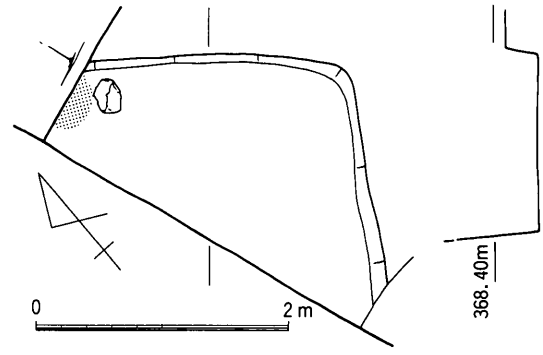
覆土：黒褐色粘質土　礫混入

床面：中央付近でやや堅緻

壁：北壁及び東壁のみ検出

カマド：東壁中央付近に構築

柱穴：未検出



第9図　3号住居跡（1:60）

調査状況：北調査区の最も北端で検出された住居で、1号溝跡に東壁の一部を破壊される。また、北壁は、調査区の北端に設けた試掘坑により破壊してしまっており規模などは不明であるが、試掘坑脇にカマド袖石の一部と火床が検出されたことから、ここを住居北壁の中心と想定した場合一辺が4m前後の住居となる。

覆土内からは多くの礫とともに遺物が出土している［第11図］。

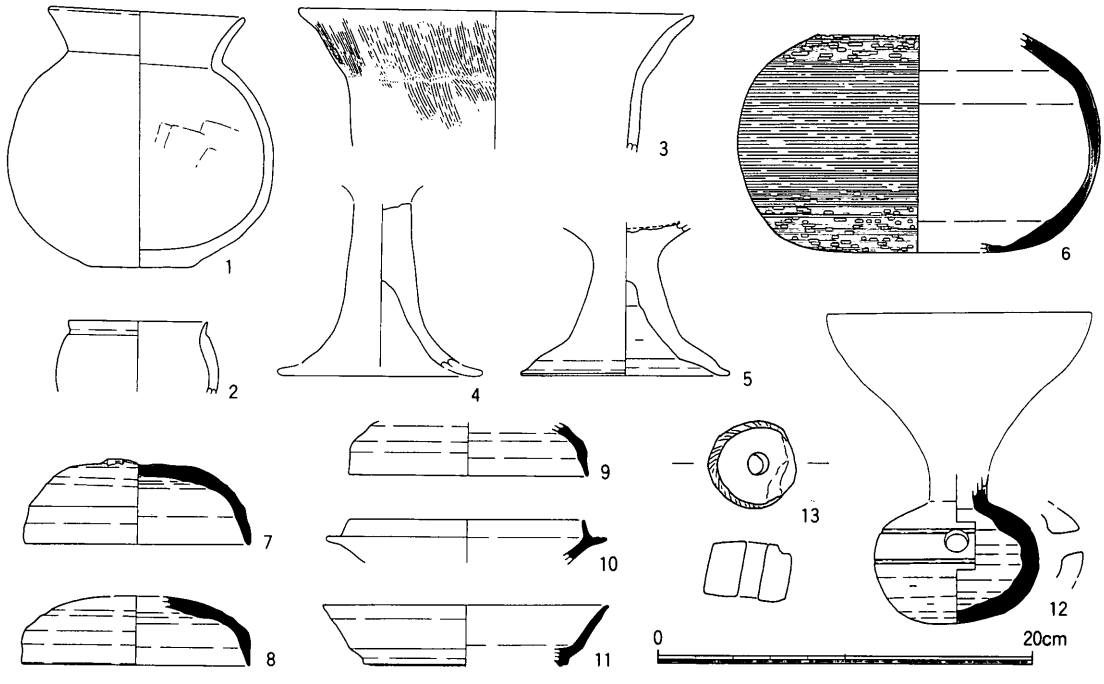
出土遺物：土師器壺（1・2）、土師器甕（3）、土師器高坏（4・5）、須恵器壺（6）、須恵器蓋（7～9）、須恵器坏（10）、須恵器瑰（11・12）、滑石製の玉（13）がある。

1は内面に板ナデの痕跡が僅かに残る。高坏はいずれも坏部が欠損し全体を把握することはできない。6の外面はカキメが施され、表面には自然釉が付着する。

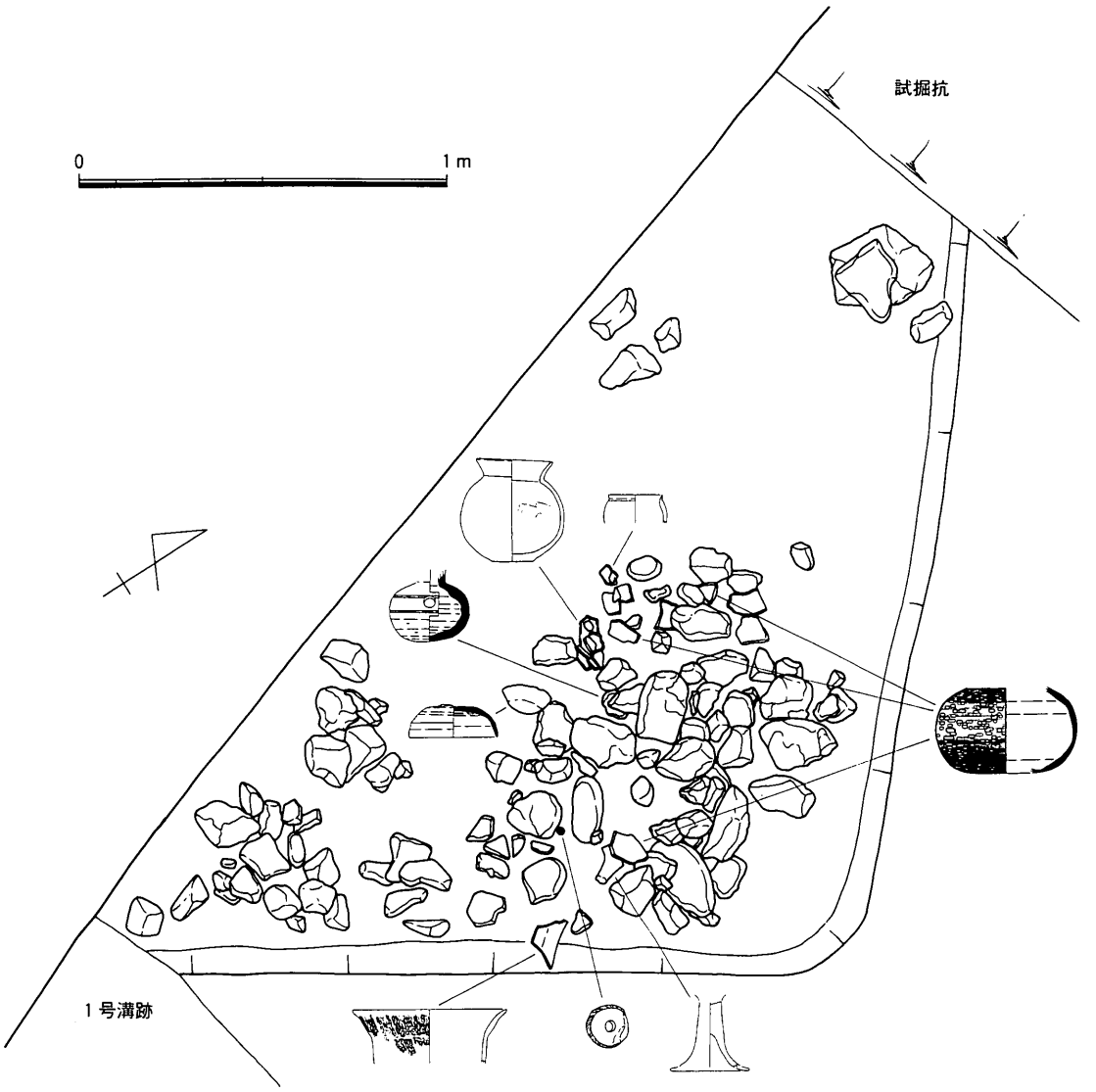
11は小さな破片であり全体を把握することは困難であるが、瑰の口縁部破片と思われる。

12は瑰の胴部で、2本の沈線の間に孔が1つ穿たれる。胴部下半はヘラケズリによる整形が行われている。

滑石製の玉は、直径11.5mm、厚さ7.2mmを測る。側面には幾筋もの擦痕が観察されるが、どの面においても研磨はされておらず、完成品なのか製作途上であるのか判然としない。



第10図　3号住居跡出土遺物（1:4　13のみ1:1）



第11図　3号住居跡遺物出土状況（1:20）

4号住居跡

規模：不明　　**平面形**：方形

主軸方向：不明　**時期**：古墳時代後期

覆土：黒褐色粘質土　礫混入

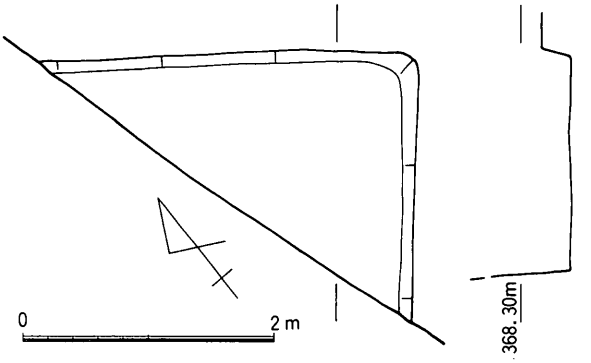
床面：軟弱　　**壁**：北壁及び東壁のみ検出

カマド：調査範囲内において未検出

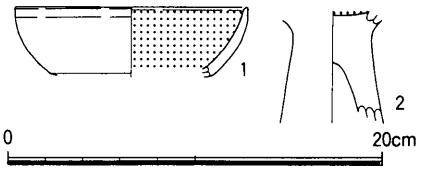
柱穴：未検出

調査状況：北調査区の中央付近に検出された住居で、北東隅のみの検出であったため規模などは不明である。カマドや柱穴など内部施設については検出されていない。

出土遺物：図化したできたものはいずれも高坏で、1は坏部、2は脚部のそれぞれ破片である。双方とも内面を黒色処理されヘラミガキが施される。



第12図　4号住居跡（1:60）



第13図　4号住居跡出土遺物（1:4）

5号住居跡

規模：4.88m×—　　**平面形**：方形

主軸方向：N—13°—W

時期：古墳時代後期

覆土：黒褐色粘質土　礫混入

床面：軟弱

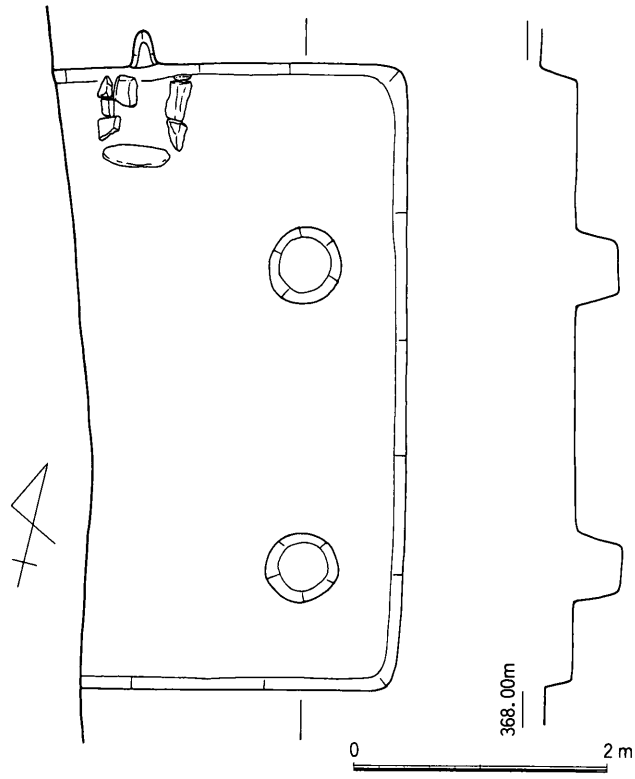
壁：西壁未検出

カマド：北壁中央に構築

柱穴：2基

調査状況：北調査区の南端で検出された住居で、地形が北から南へと傾斜している最低地に構築されている。

カマドは北壁に石組みにより構築されており、煙道も確認でき、内部から甕2個体、右側袖石付近に甕1個体が出土している。



第14図　5号住居跡（1:60）

第16図にカマドの検出状況を示した。

両袖に使用された石は、いずれも内面が被熱により赤く変色し、カマド手前の床面から出土した細長い石も表面が赤く変色しており焚口に使われた石と思われる。

カマド内で出土した甕はいずれもつぶれた状態で出土している。図示したものよりもはるかに多くの破片が出土しているものの、住居の調査過程において、粘質の強い覆土と湧水により遺物の現位置を保つことができなく、また廃土に紛れ紛失する可能性が高かったため、小さな破片については取り上げを行いながら調査を進めた。

当該遺構が検出された場所は、先述したとおり、北調査区内において最も低地となる場所で、北端の3号住居跡から5号住居跡までは約40cm低くなる。よって、調査区内の至る所で湧き出る地下水や雨水が全てここに集まり、5号住居跡付近での遺構検出作業は困難を極めた。

5号住居跡は排水用のトレンチを掘った際に確認できた遺構であり、これ以外の場所は検出作業すらできていない。よって、他の遺構の存在や重複関係などは全くわからない状況である。

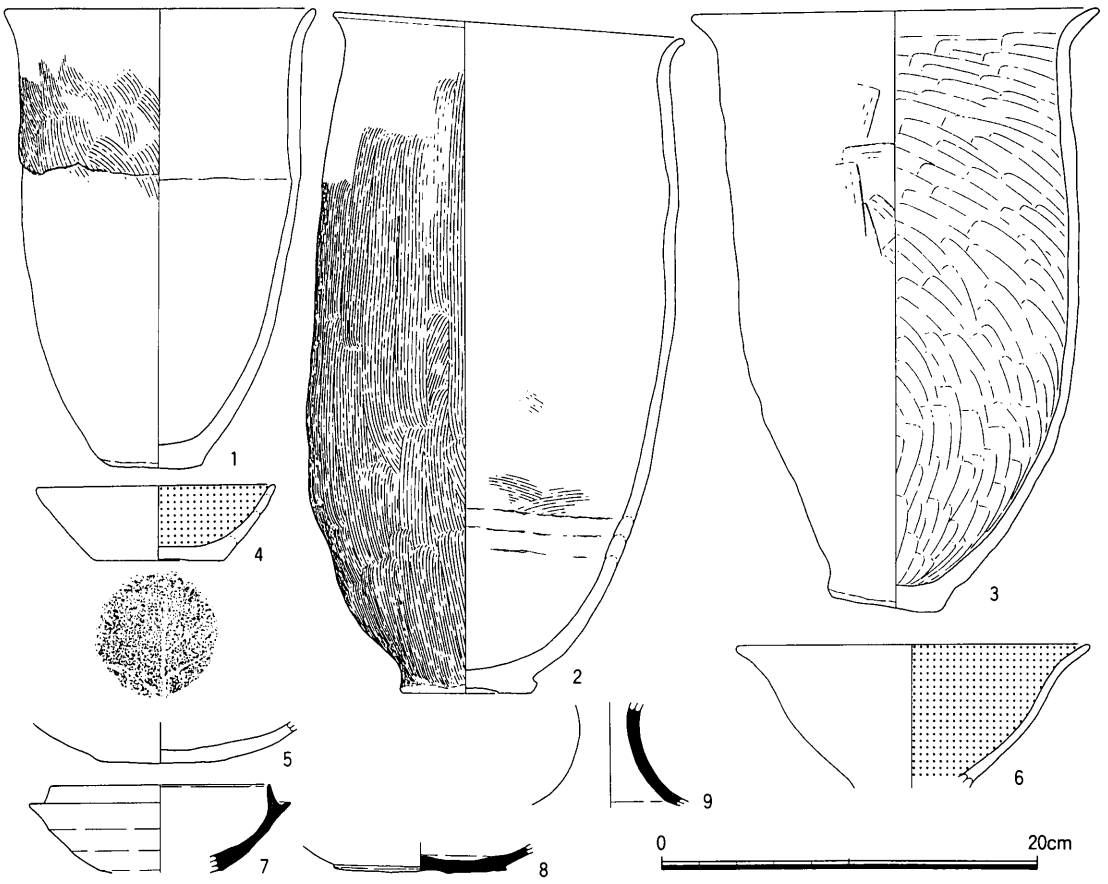
出土遺物：土師器甕（1～3）、土師器坏（4）、土師器壺（5）、土師器高坏？（6）、須恵器坏（7）などが出土している。

1は胴部に輪積みの痕跡を残して有段とし上半のみにハケ調整を行い、下半はナデのみとなる。2は外面にハケ調整、内面はナデにより整形され、ハケ調整が僅かに残る。

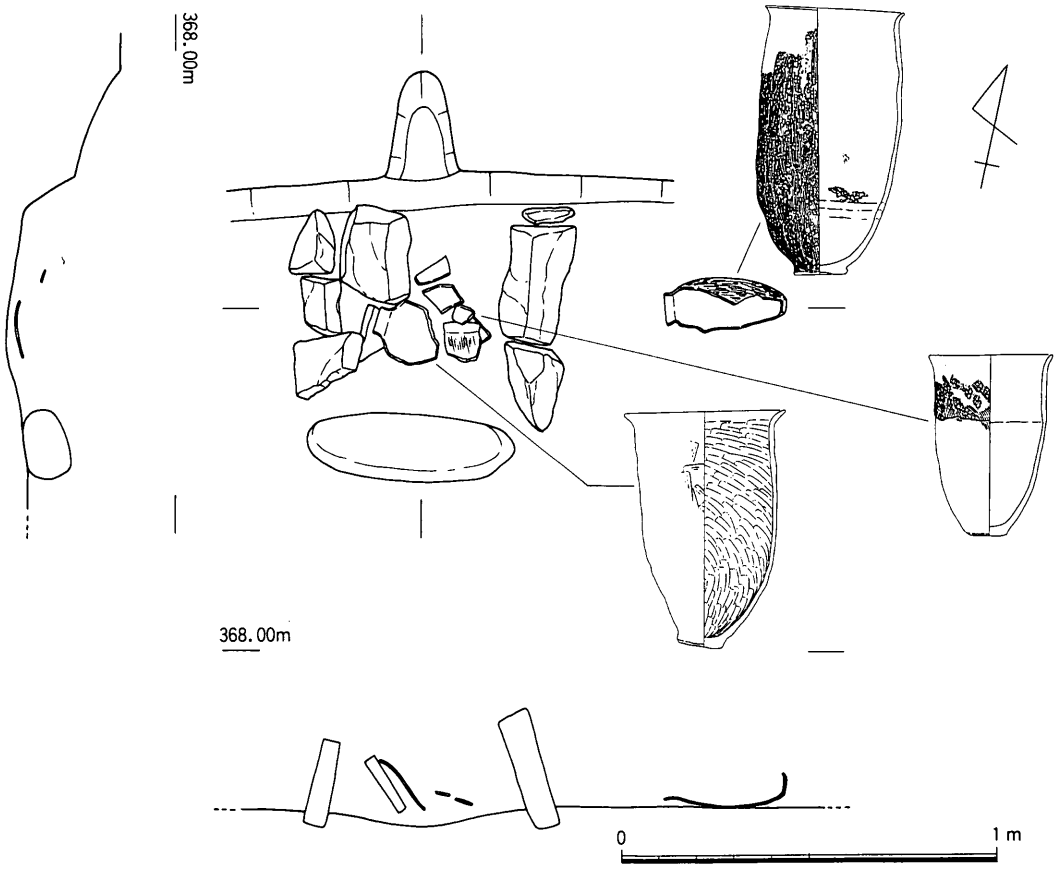
3の外面には一部に板ナデが見られるものの、全体的にナデで整形されている。内面は全体的に板ナデによる。底部は片方に反りを見せており、安定していない。出土した甕はすべて長胴甕であり、1と2はカマド内から、3はカマド右袖付近から出土している。

4は内面を黒色処理されヘラミガキを施す。底部に木葉痕がある。6は内面が黒色処理された高坏の坏部と思われる。

8は壺の底部、9は高坏の脚部と思われる。



第15図　5号住居跡出土遺物（1：4）



第16図　5号住居跡カマド実測図（1:20）

第４節　土坑・その他の遺構と遺物

今回の調査において、竪穴住居以外の遺構として土坑６基、溝跡１本、ピット９基を北調査区で、中世水田跡を南調査区で検出している。

ここでは、土坑・溝跡・水田跡をそれぞれ概観する。なお、ピットについては、時代を特定できる出土遺物がなく、掘立柱建物跡のように他のピットと組み合わさるものもないため割愛した。

１号土坑

１号住居跡の南側に検出された、長辺70cm、短辺46cmを測る楕円形の土坑である。深さは遺構確認面より７cm前後と浅く遺物の出土もあまり多くはないが、高坏［第17図１］が出土している。

外面はナデによる整形がされ、坏部内面は黒色処理がされる。口縁部は強いヨコナデによって外半させ、胴部に膨らみを持ちながら脚部へと至る。脚は柱状となるものと思われる。

２号土坑

１号土坑に接する形で１号住居跡の南側に検出された土坑で、長辺２m、短辺1.48m の方形を呈する。深さは20cmほどあり、底面の一部に柱穴のような深さ40cmの堀り込みが１基確認され、この内部より土器［第17図２・３］が出土している。

２は甕で頸部から下にハケを施す。口縁部はヨコナデにより整形される。３は甑の底部破片で、現状で５つの孔が穿たれている。

３号土坑

２号住居跡の北側に検出され、南北1.73m を測る。西側は調査区域外により検出できていないため、規模や平面形は不明である。

覆土からは比較的多くの遺物が出土しているものの、図化できたのでは坏１点［第17図４］のみである。内面が黒色処理され、後にヘラミガキが施される。

４号土坑

３号住居跡の東側に検出された、長辺１m、短辺52cmを測る楕円形の土坑である。深さは10cm前後を測り、覆土より高坏の坏部破片［第17図５］が出土している。

内面を黒色処理され、内外面ともに丁寧にヘラミガキされる。

５号土坑

直径62cmの円形を呈し、深さは35cmを測る。土器の出土量は少なく須恵器の蓋が１点［第17図６］出土したのみである。

６号土坑

直径80cm程の変形した円形を呈する土坑で、深さは50cmを測る。第17図７は甕の底部で、木葉痕がある。８は大型の壺の口縁部破片である。

１号溝跡

北調査区の３号住居跡の壁を一部破壊して構築しており、調査範囲内において弓状に弧を描いている。幅は50cm前後であり、深さは20cm～30cmを測る溝跡である。

中央付近にある張り出し状の掘り込みは土坑と重複しているものと思われ、当該遺構に付属するものではないが、新旧関係については明確にできなかった。

出土遺物は僅かに平安時代の土器片が出土しているものの、図化できるものはなかった。

水田跡

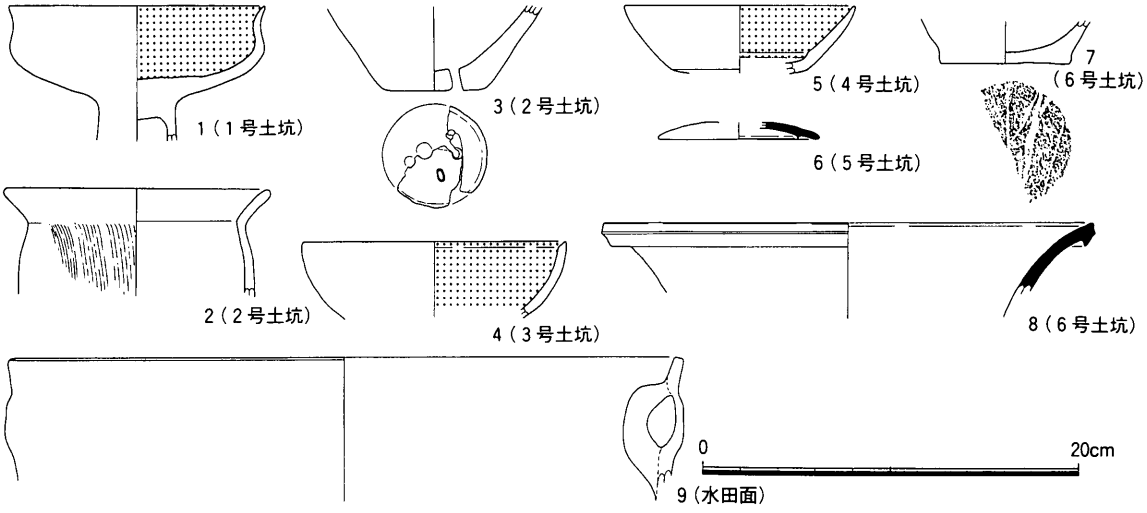
南調査区の調査を開始した際に行った試掘により存在が明らかとなり、調査を進めたものであるが、出土する遺物の様相から中世の水田跡と認識して調査を行った。南調査区は最上部と最下部の比高差が約４ｍを測り、現在水田として区画されている場所である。水田の造成を行った際に土壌改良を行ったものと見られ、地表下20～30cm程で検出される中世水田面は大半が既に破壊されている状況であったため、水田跡として調査できたのは一部に過ぎないが、水田跡として認識できた箇所は、全てにおいて粗い砂が水田面を被覆している。

第４図のドットで示した部分は、この粗砂が被覆し、水田跡として調査できた部分であり、斜線で示した部分は後世の暗渠排水の構築あるいは何らかの掘削により破壊されている箇所である。

南調査区上部で検出された水田跡は、畦畔状の高まりは検出できなかったものの、砂の被覆する箇所が遺構確認面の途中から検出され、水田面と思われる凹凸が観察されている。なお、この区で水田面として認識できなかった部分は削平されてしまったものと考えられる。

南調査区下部で検出された水田跡は、高さ５cm程の畦畔状の高まりを検出している。水田面を検出する作業の際に粗砂内から内耳鍋破片［第17図９］が出土している。

なお、畦畔状の高まりは平面図の作成は終わっていたものの台風23号の豪雨により遺構面が流されてしまい、写真撮影による記録ができなかった。

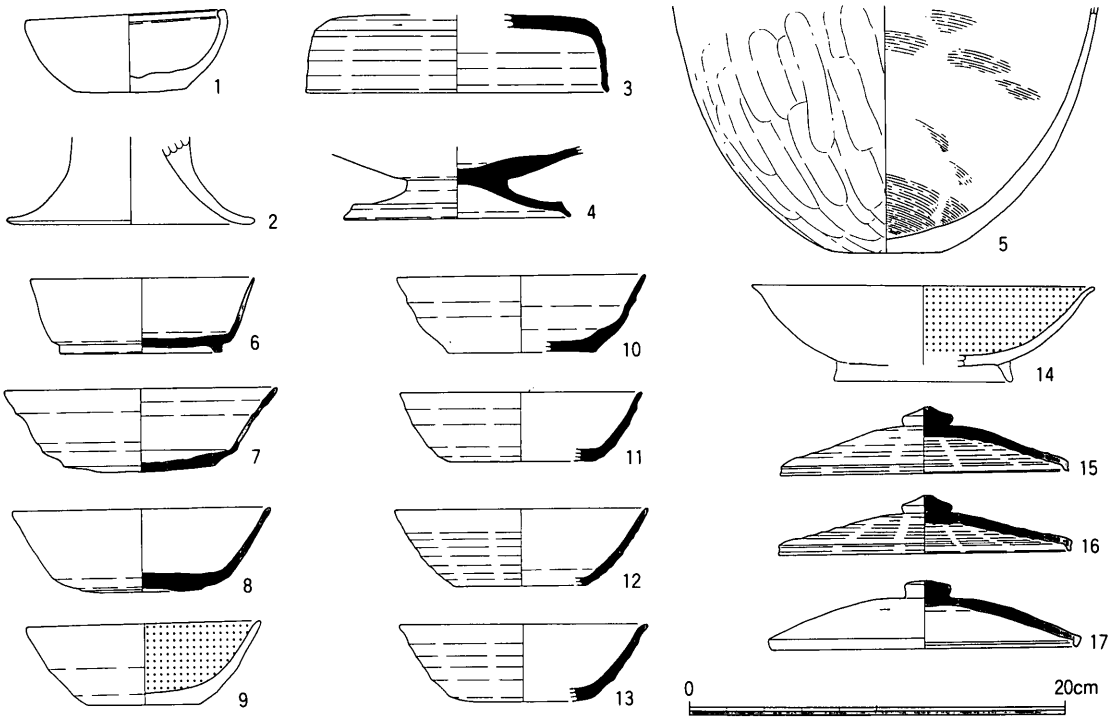


第17図　土坑・水田面出土遺物（1：4）

遺構外出土遺物

第18図に示した遺物は遺構検出作業中に出土した土器で、図化できたものについて掲載した。

１は内外面ともにナデにより整形される。３は壺蓋と考えられ表面の凹凸が著しい。４は台付壺の脚部と思われる。焼成は良好であるが器形の歪みが見られ、二次焼成によるものかどうか判然としないが器壁が空洞状になっている箇所も見受けられる。５は外面をヘラケズリ、内面はハケとナデにより整形される。６～13は坏である。７・９は底部ヘラ切りにより、残りは糸切りによる。８は糸切りの後ヘラケズリにより底部を調整する。14は内面を黒色処理した椀で、底部の一部と高台部分を欠損する。15～17は須恵器の蓋で、いずれも宝珠状のつまみを持つ。15・16はロクロナデによる凹凸が著しく、一部にヘラケズリがされる。17はヘラケズリの痕跡が一部に見られるものの、ロクロナデの凹凸はなく、つまみも前２者と異なり頂部がやや平坦となる。表面には自然釉がかかる。



第18図　遺構外出土遺物（1：4）

東條遺跡検出遺構観察表

遺構名	時　　代	出土遺物	特記事項
1号住居跡	平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）	土師器・須恵器・灰釉陶器	2号住居跡と重複
2号住居跡	古墳時代（7世紀初頭～7世紀前半）	土師器・須恵器	東壁に石組みカマド　礫多量
3号住居跡	古墳時代（6世紀末～7世紀初頭）	土師器・須恵器・滑石玉	北東壁に石組み？カマド　礫
4号住居跡	古墳時代（6世紀後半～7世紀前半）	土師器	
5号住居跡	古墳時代（6世紀後半～6世紀末）	土師器・須恵器	北壁に石組みカマド
1号土坑	古墳時代（6世紀後半～7世紀前半）	土師器	
2号土坑	平安時代（10世紀前半）	土師器・須恵器	
3号土坑	古墳時代（6世紀後半～7世紀前半）	土師器	
4号土坑	古墳時代（6世紀後半～7世紀前半）	土師器	
5号土坑	古墳時代（6世紀後半～7世紀前半）	土師器・須恵器	
6号土坑	平安時代（10世紀前半）	土師器・須恵器・灰釉陶器	
1号溝跡	平安時代（10世紀前半）	土師器・須恵器	3号住居跡と重複
水田跡	中世（15世紀？）	内耳鍋・磁器	大半が破壊されている

東條遺跡出土遺物観察表①

番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高	外面	内面	
1号住居跡（第6図）							
1	坏	12.6	6.3	3.4	ロクロナデ　底部糸切り	ロクロナデ	
2	坏	12.3	5.6	3.4	ロクロナデ　底部糸切り	黒色処理　ヘラミガキ	
3	坏	13.4	5.8	3.8	ロクロナデ　底部糸切り 底部付近にヘラケズリ	黒色処理	
4	坏	14.2	6.0	3.6	ロクロナデ　底部糸切り	黒色処理	
5	坏	13.5	4.7	4.4	ロクロナデ	黒色処理	
6	坏	13.4		4.6	ロクロナデ	黒色処理　ヘラミガキ	
7	盤	12.2	5.6	2.1	ロクロナデ	黒色処理　ヘラミガキ	
8	盤			3.8	ロクロナデ	黒色処理	
9	坏	13.4	5.0	3.9	ロクロナデ　底部糸切り	ロクロナデ	
10	坏	12.4	5.4	3.9	ロクロナデ　底部糸切り	ロクロナデ	
11	坏	12.5	5.4	3.7	ロクロナデ　底部糸切り	ロクロナデ	
12	坏	12.8	5.6	4.2	ロクロナデ　底部糸切り	ロクロナデ	
13	坏	12.3	5.0	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	
14	坏	13.4	6.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	
15	坏	13.6	6.2	4.3	ロクロナデ　底部糸切り	ロクロナデ	
16	坏	12.8	5.4	4.4	ロクロナデ　底部糸切り	ロクロナデ	内外面に墨書
17	坏	13.2		2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	外面に墨書
18	坏	12.0		3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	外面に墨書
19	坏	12.6		2.7	ロクロナデ	ロクロナデ	外面に墨書
20	坏		6.6	2.1	ロクロナデ　底部糸切り	ロクロナデ	外面に墨書
21	椀	14.6	7.8	5.3	ロクロナデ 釉薬刷毛掛け	ロクロナデ 釉薬刷毛掛け	
22	椀		6.6	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ　自然釉	
23	甕	14.5	5.8	14.2	口縁部ヨコナデ　ナデ	ナデ	
24	甕	22.4		16.2	口縁部ヨコナデ　ナデ	ナデ	
25	甕		6.8	7.5	ロクロナデ	ロクロナデ	
26	甕		6.8	9.5	ナデ	ロクロナデ	
27	壺？		7.0	4.8	ナデ	ナデ	
2号住居跡（第8図）							
1	壺	15.0		20.0	口縁部ヨコナデ ナデ→ヘラミガキ	ナデ	
2	椀	17.6	5.0	10.0	ナデ→ヘラミガキ	黒色処理　ヘラミガキ	
3	椀	13.2	4.7	5.6	ナデ→ヘラミガキ	黒色処理　ヘラミガキ	
4	鉢	14.0	5.8	13.4	口縁部ヨコナデ　ナデ	ナデ	
5	甑			13.8	ナデ→ヘラミガキ　外耳	ナデ→ヘラミガキ	
6	甑	16.1	4.4	10.8	口縁部ヨコナデ　ヘラミガキ	ヘラミガキ？	
7	壺？			4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	
8	蓋	13.0		3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	

東條遺跡出土遺物観察表②

番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高	外面	内面	
9	蓋	13.2		4.3	ロクロナデ　ヘラケズリ	ロクロナデ	
10	鉢	14.0		4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	
11	不明		16.1	2.5	ロクロナデ	ロクロナデ	
12	壺	8.0		11.4	ロクロナデ　ヘラケズリ	ロクロナデ	
3号住居跡（第11図）							
1	壺	10.5	5.4	13.8	口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ ナデ→ヘラミガキ	ナデ　板ナデ	
2	壺	7.2		3.8	口縁部ヨコナデ　ヘラミガキ	ナデ	
3	甕	21.0		7.2	口縁部ヨコナデ　ハケ	ナデ	
4	高坏			8.7	ヘラミガキ	ナデ	
5	高坏		11.2	8.2	ヘラミガキ	脚部ヘラケズリ	
6	壺		8.0	11.5	カキメ　自然釉付着	ロクロナデ	
7	蓋	12.0		4.5	ロクロナデ　自然釉付着	ロクロナデ	
8	蓋	12.0		3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	
9	蓋	12.6		2.8	ロクロナデ	ロクロナデ	
10	坏	12.4		2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	
11	瓶？	15.6		3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	
12	瓶			7.9	ロクロナデ　沈線２本　１孔 胴部～下半ヘラケズリ	ロクロナデ	
4号住居跡（第13図）							
1	高坏	12.2		3.7	ナデ→ヘラミガキ	黒色処理　ヘラミガキ	
2	高坏			5.9	ヘラミガキ	坏部　黒色処理 脚部　ヘラケズリ？	
5号住居跡（第15図）							
1	甕	16.4	5.5	23.9	口縁部ヨコナデ 胴部上半ハケ　下半ナデ	ナデ	カマド内出土
2	甕	18.6	7.0	35.2	口縁部ヨコナデ　ハケ	ナデ　ハケ	カマド右側出土
3	甕	21.6	5.5	31.7	口縁部ヨコナデ　ナデ　板ナデ	板ナデ	カマド内出土
4	坏	12.7	7.0	4.0	ナデ　底部に木葉痕	黒色処理　ヘラミガキ	
5	壺		6.6	2.2	ナデ	ナデ	
6	高坏？	18.4		7.5	ナデ	黒色処理	
7	坏	11.8		4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	
8	壺？		9.2	1.6	ロクロナデ	ロクロナデ	
9	高坏？			5.5	ロクロナデ	ロクロナデ	
1号土坑（第17図）							
1	高坏	13.6		7.1	ナデ	坏部　黒色処理	
2号土坑（第17図）							
2	甕	14.2		5.7	口縁部ヨコナデ　ハケ	ナデ	
3	甑		5.4	4.4	ヘラミガキ　現状５孔	ナデ	

東條遺跡出土遺物観察表③

番号	器種	法量（cm）			成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高	外面	内面	
3号土坑（第17図）							
4	坏	14.0		4.0	ナデ	黒色処理　ヘラミガキ	
4号土坑（第17図）							
5	高坏	12.2		3.5	ヘラミガキ	黒色処理　ヘラミガキ	
5号土坑（第17図）							
6	蓋	8.6		1.0	ロクロナデ　自然釉付着	ロクロナデ	
6号土坑（第17図）							
7	甕		6.7	2.2	ナデ　底部に木葉痕	ナデ	
8	壺	26.0		5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	
水田面（第17図）							
9	鍋	36.0		7.6	ロクロナデ　スス付着	ロクロナデ　内耳	
遺構外（第18図）							
1	坏	10.6	5.9	4.1	ナデ	ナデ	
2	高坏		13.0	4.5	ナデ	ナデ	
3	蓋	16.0		4.0	ロクロナデ　ヘラケズリ	ロクロナデ	
4	壺？		12.0	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	
5	甕		6.0	12.9	ヘラケズリ	ナデ　ハケ	
6	坏	11.9	8.6	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	
7	坏	14.6	8.1	4.3	ロクロナデ　底部ヘラ切り	ロクロナデ	
8	坏	13.8	6.4	4.3	ロクロナデ 底部糸切り→ヘラケズリ	ロクロナデ	
9	坏	12.5	6.0	4.3	ロクロナデ　底部ヘラ切り	黒色処理　ヘラミガキ	
10	坏	13.2	8.0	4.2	ロクロナデ　底部糸切り	ロクロナデ	
11	坏	12.8	7.9	3.6	ロクロナデ　底部糸切り	ロクロナデ	
12	坏	13.6	7.0	4.0	ロクロナデ　底部糸切り	ロクロナデ	
13	坏	13.2	7.0	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	
14	椀	18.2		4.2	ロクロナデ	黒色処理	
15	蓋	15.3		3.4	ロクロナデ　ヘラケズリ	ロクロナデ	
16	蓋	15.5		3.0	ロクロナデ　ヘラケズリ	ロクロナデ	
17	蓋	16.2		3.5	ロクロナデ　ヘラケズリ 自然釉付着	ロクロナデ	

第４章　まとめ

１）古墳時代住居跡及び土坑の時間的位置について

検出された古墳時代の遺構は、竪穴住居跡４棟、土坑４基である。出土土器の様相からおおまかには６世紀後半から７世紀前半の時間設定をすることが可能であるが、須恵器の様相から３つの段階に分類することができる。

５号住居跡が最も古く、陶邑編年のTK43段階（６世紀後半～末）と考えられる。次は３号住居跡でTK209段階（６世紀末～７世紀初頭)、最も新しい住居跡は２号住居跡でTK217段階（７世紀初頭～前半）と捉えることができようか。

また、４号住居跡・４号土坑は３号住居跡と、５号土坑は２号住居跡と、それぞれ出土土器の様相から同じ段階として考えてもよさそうである。

２）住居跡出土の礫について

２号住居跡と３号住居跡からは人頭大から拳大ほどの礫が多く出土している。４号住居跡及び５号住居跡からも出土しているが、その量は比較にならないほどであり、特に２号住居跡は床一面に礫が散乱している状態であった。

本書第２章において触れたが、当該地域は姨捨土石流によって形成され、今から約3,000年前に終息したと言われている。この姨捨土石流台地上には弥生時代以降各時代にわたり集落を形成していることから察すれば、その後地盤は安定し、居住地として選択可能な土地となっていたことは明らかであろう。

２号住居跡の礫の出土状況をみると、そのほとんどが床面に接して一箇所にかたまることなく住居全体から出土している。余談になるが、２号住居跡からは石組みのカマドを東壁中央付近に検出しているが、住居を掘り下げ、礫を検出し、礫の出土状況写真を撮影した後、礫を除去する段階になって初めてカマドの存在に気付いたくらい、夥しい量の礫が住居全体から出土している。

出土した礫を１つ１つ観察したわけではないので断言はできないが、カマドの部材に使用された礫以外に人為的に持ち込まれたと思われるものはない。そもそもこの時期、カマドの部材用以外に大きな礫を住居内に用いる例はあまりみられないが、ここで言う“人為的な持ち込み”とは、明らかにその礫が生活の道具としての機能を果たすもの、あるいは住居施設を構成する要素を持ち得た礫を差しているものであって、住居廃絶時に投棄あるいは廃棄された礫とは性格を異にする。

さて、これら住居跡内の礫のあり方についてであるが、大きく２つの可能性が考えられる。

１つは、自然災害等によりもたらされたもの。もう１つは、人の手によって二次的な移動を伴って運び入れられたもの。である。

前者は、かなり集中的な流れ込みでない限り一箇所にかたまることはまず考えられず、周辺地域一帯に検出されるものである。後者は、ある特定の場所に集中的に混入するものであって、検出される場所とされない場所が明確に分かれる。

これを踏まえ当該遺跡を見てみると、平安時代から古墳時代に至る遺物包含層には普遍的に礫が混入している。長野県埋蔵文化財センター（以下　県埋文センター）の調査地点においても多量の礫が検出されていることから、自然流入を考えることが妥当であり、この東條遺跡一帯が古墳時代の終わ

りごろに大規模な土石流に遭っている可能性が高くなってきた。

個々の遺構を見てみると、２号住居跡は先述したとおり住居全体にほぼ満遍なく出土している一方、３号住居跡については全体を検出できたわけではないので詳細については明確ではないが、礫はある程度かたまりを見せ、土器等の遺物が混在しながら床面から10cmほど浮いた状態で出土している。

人が物を廃棄する場合、特に住居のような比較的広い施設へ重い石をいくつも投げ入れる場合は、その行為に何かしらの儀礼がない限り、心情的に、わざわざ住居の中央まで持ち込むことはせず、廃棄しやすい掘り込みの淵付近に投げ入れるため、結果的に礫は住居の壁際辺りにかたまって出土することとなる。

このようなことから、２号住居跡の礫は自然流入の可能性が高くなり、３号住居跡の礫は壁際にまとまっており、土器等の遺物の混在も認められることから人為的な廃棄の可能性が高くなる。

２号住居跡は今回調査された古墳時代の住居跡の中で最も新しい段階に位置付く住居跡であることから７世紀前半ごろに比較的大規模な土石流が発生し、集落を礫交じりの土砂が覆いつくした可能性は十分に考えられる。

３）居住域と低湿地帯について

今回の調査において、古墳時代当時の地形が北から南の兎沢川へ向かって傾斜していることが明らかとなった。

北調査区北端では地表下１ｍ前後で古墳時代から平安時代の遺物包含層が確認されていることから、南調査区の試掘坑調査において確認された２ｍ以上もの粘土の堆積は、少なくとも兎沢川沿いに古墳時代から平安時代の遺跡は存在せず、住居跡等遺構の検出された北調査区や県埋文センター調査区の様相とは異なった環境となっていることを示唆しているものと思われる。

また、兎沢川を挟んだ南側一帯は、調査地より一段低くなった低地となっているため、この兎沢川付近が居住域の南限となる可能性が考えられ、低湿地帯の存在をより明確なものとしている。

北調査区の遺構検出に際しては、当該地の地山とも言うべき古墳時代遺物包含層直下の茶褐色粘質土を遺構確認面とした。

この茶褐色粘質土は調査区北端から２号住居跡付近まで明確に存在するものの、２号住居跡と４号住居跡の間付近で、黒灰色の砂利に変化してしまっている。

茶褐色粘質土は砂利の下へ潜ることなく、この場所で完全に姿を消してしまっており、ちょうどこの地点から地形の傾斜が顕著となってくる。

４号住居跡及び５号住居跡はこの黒灰色砂利層を掘り込んで構築しており、古墳時代以降は居住地として選定できる土地であったことは確かである。ただ、５号住居跡の南側にはこの砂利層が急激に落ち込む場所があり、その上面に南調査区で検出された粘土と同様の粘土が厚く堆積している。

トレンチ調査による観察であるため細かな内容については明確ではないが、北調査区での地山の変化と地形の傾斜、南調査区試掘坑での粘土の堆積と遺物包含層の未検出、兎沢川以南の低地の存在などを総合して、５号住居跡は東條遺跡の居住域南端に位置しているものと考えられ、兎沢川付近を境に南側は低湿地帯となる可能性が高いものと思われる。

４）平安時代の集落について

平安時代の遺構としては竪穴住居跡１棟と土坑２基、溝跡が１基検出されている。

第３図の基本層序とした断面図にも示したとおり、奈良時代の遺物を含む平安時代遺物包含層（以

下　平安層）と古墳時代遺物包含層（以下　古墳層）とが間層を挟まずに接して確認されていることから、遺構検出においては平安時代から古墳時代までの遺物がありとあらゆるところから出土し、古墳層中に構築されていた可能性の高い奈良時代や平安時代の遺構の確認がほとんどできなかったのは残念である。

目視によるものではあるが、平安層と古墳層とは、色調、炭化物等内容物の有無、また土の粘り、しまりなど双方の様相は大変似てはいるものの、断面においての分層は比較的容易であった。しかし平面となるとこれとは異なり、黒い土の中に掘り込まれた黒い覆土の遺構を検出しなければならなく、加えて、湧水が激しいため遺構の検出はより困難となり、結果的に奈良・平安時代の遺物は多く出土するものの少数の遺構しか確認できなかった。

１号住居跡は、一辺が５ｍ弱を測る普遍的な住居跡である。内部からは坏を中心に多くの遺物が出土しているが、特に須恵器の墨書土器が比較的多く出土していることが注目される。すべて破片資料のため文字全体を把握することができないが、それぞれ違った字である可能性が高く、中には、字なのか、絵なのか、記号なのか判断に苦しむ墨書もある。

５）中世水田跡と居住域について

東條遺跡は、弥生時代から平安時代の集落遺跡として周知されており、中世の遺構の存在について調査前はまったく注意していなかったが、試掘調査またはトレンチ調査の結果、当該地周辺に中世遺跡が展開していることが明らかとなった。

検出された遺構は水田跡のみであり、現水田の耕作等により遺構のほとんどに破壊を受けていたことは残念であったが、北調査区の断面にも南調査区同様に中世水田跡と思われる粘質土が認められていることから、遺跡全体に中世水田跡が広がっているものと判断する。

現在県埋文センターによって進められている国道18号バイパス建設工事に伴う発掘調査で、東條遺跡の北西に隣接する八日市場地籍に新たに中世の居住域が発見されている。井戸跡や木製品など多くの遺構・遺物が出土しているが、東條遺跡の範囲からは外れており、新たな中世居住域として展開しているものと思われる。

今回調査した中世水田跡がこの中世居住域と関連があるものか否かについては明確ではないが、一連の遺跡として捉えて不都合はないように思う。

今回の調査は、東條遺跡の南端付近に幅約４ｍの細長いトレンチを掘った形の調査であり、東條遺跡の全体像を捉えるには程遠い面積の調査であったが、国道18号バイパス建設工事に伴う発掘調査が実施され、整理作業も現在進められている中で、東條遺跡の全体像も見えてくるであろう。

県埋文センターが実施した東條遺跡の発掘調査については、同所発行の年報に概要報告がなされている。これによれば、古墳時代後期から平安時代までの集落遺跡が調査されており、その時期や内容については今回の調査と一致するものであるが、中でも特に、一辺が８ｍほどの古墳時代後期の大型住居跡からは珠文鏡が一面出土しており、周辺に点在する坪山古墳や判官塚古墳、姨捨塚穴古墳などの後期古墳との関係も今後注視されよう。

最後に、今回の東條遺跡の発掘調査遂行にあたり、関係された皆様のご協力に対し深く感謝するとともに、長野県埋蔵文化財センター町田勝則調査研究員には、東條遺跡の調査状況並びに出土遺物に関して多くのご教授を賜った。記して御礼申し上げる。

写 真 図 版

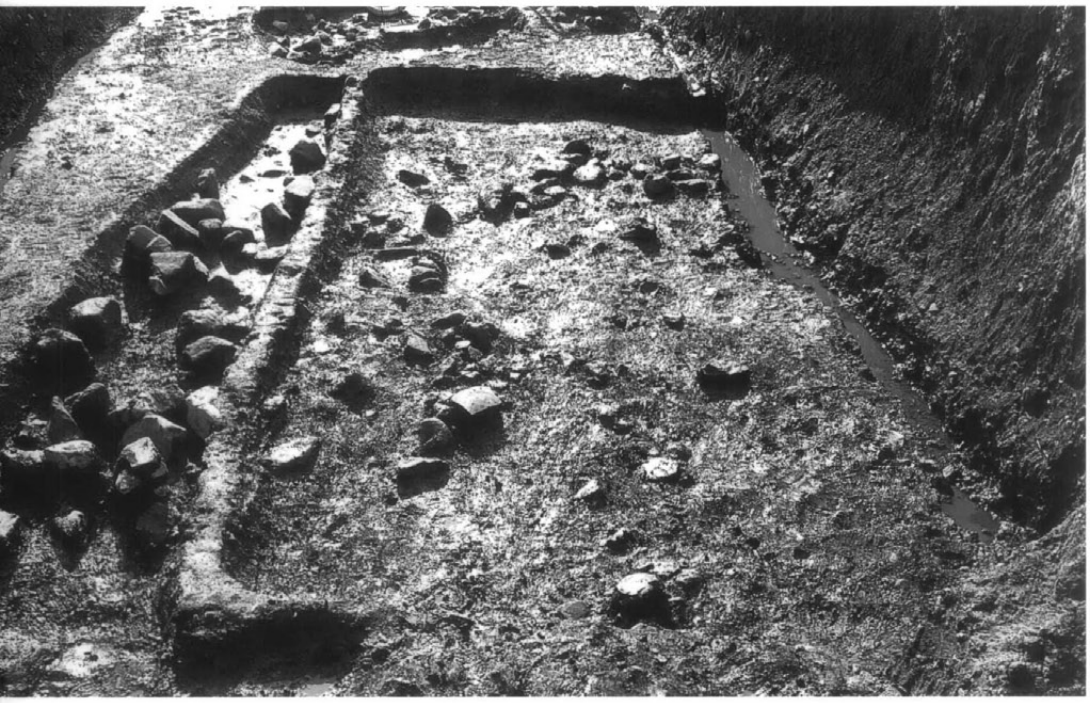
南調査区
遺構検出作業

南調査区
中世水田跡検出状況①

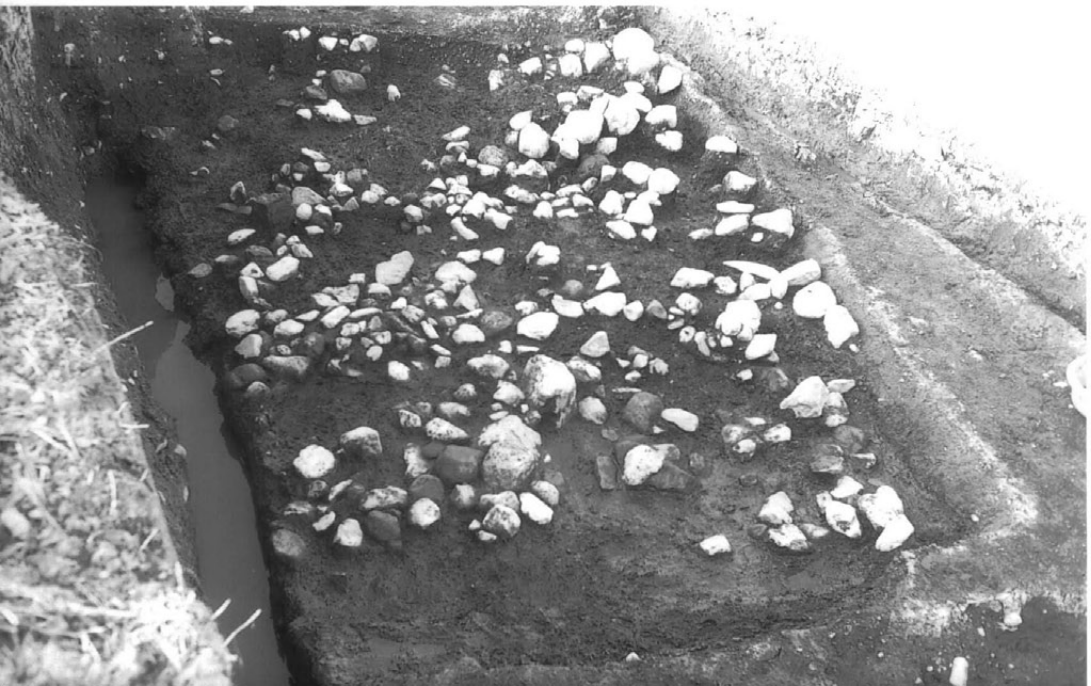
南調査区
中世水田跡検出状況②

図版2

北調査区
1号住居跡掘り下げ作業



北調査区
1号住居跡完掘状況



北調査区
2号住居跡礫検出状況

北調査区
2号住居跡完掘状況

北調査区
2号住居跡カマド検出状況

北調査区
2号住居跡遺物出土状況

図版4

北調査区
3号住居跡礫検出状況

北調査区
3号住居跡玉出土状況

北調査区
3号住居跡完掘状況

北調査区
4号住居跡完掘状況

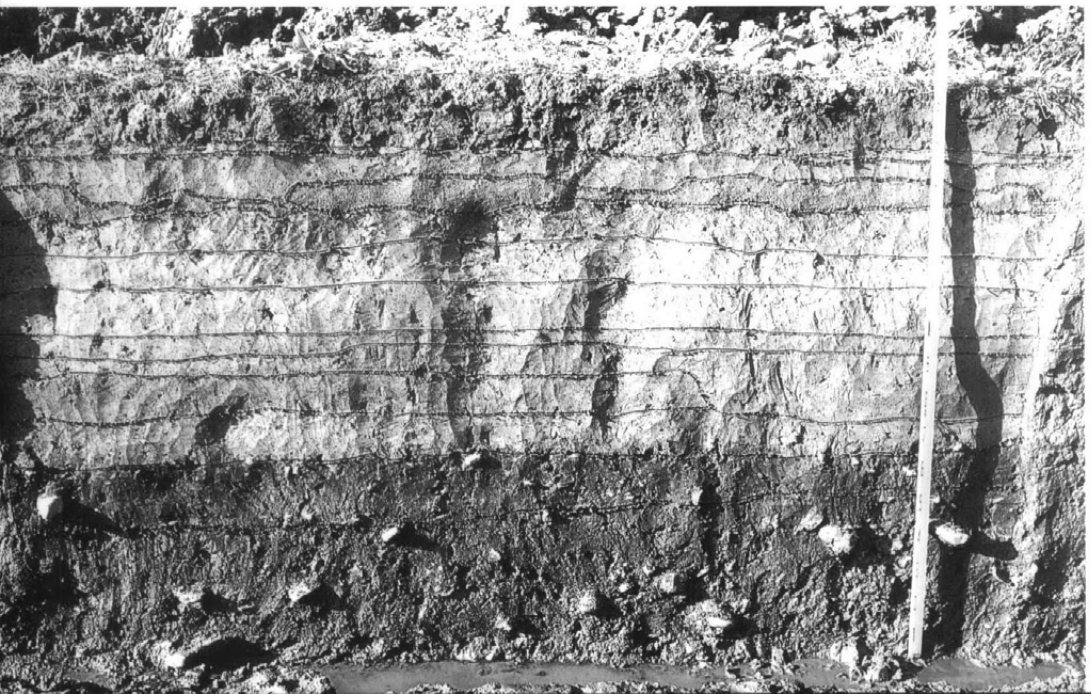
北調査区
5号住居跡遺物出土状況

北調査区
5号住居跡カマド検出状況

図版6

北調査区
5号住居跡完掘状況

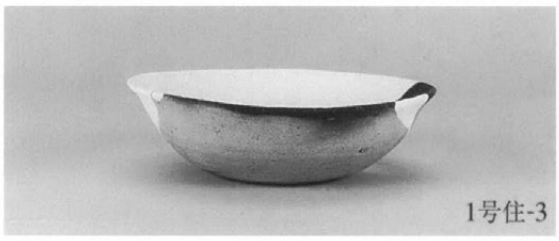
北調査区
2号住居跡・1号土坑・
2号土坑付近（南より）



北調査区
土層断面（4号住居跡付近）

1号住-2

1号住-12


1号住-3

1号住-23

1号住-7

2号住-3

2号住-12

2号住-6

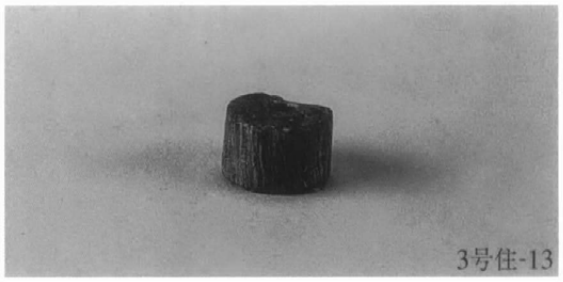
3号住-1

3号住-12

3号住-7

図版8

3号住-8


3号住-13

5号住-1

5号住-2

5号住-3

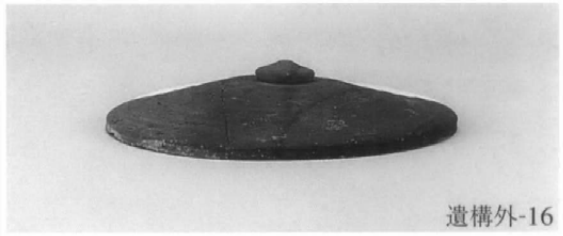
5号住-4

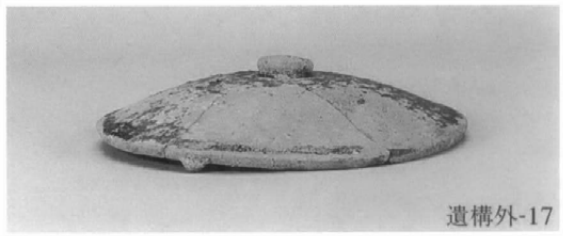
遺構外-7

遺構外-1

遺構外-15

遺構外-6


遺構外-16


遺構外-17

報告書抄録

ふりがな	ひがしじょういせき
書名	東條遺跡
副書名	国道18号バイパス代替地（上町団地）建設工事に伴う発掘調査報告書
編著者名	寺島孝典
編集機関	千曲市教育委員会　生涯学習課　文化財係
所在地	〒389－0892　長野県千曲市大字戸倉2388番地　TEL026－275－0004
発行年月日	2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
ひがじょういせき 東條遺跡	ながのけんちくましおおあざ 長野県千曲市大字 やわたあざひがしじょう 八幡字東條3928 ばんち 番地8ほか	20218	118	36 30 24	138 6 26	20050929 ～ 20051126	433㎡	道路建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東條遺跡	集落跡 水田跡	古墳時代 平安時代 中世	住居跡　5棟 土坑　6基 溝跡　1基 水田跡　1面	古墳時代後期土器・玉 平安時代土器 中世土器	古墳時代後半の集落跡が確認された。

東條遺跡

発行日　平成18年3月31日

発　行　千曲市教育委員会

〒398-0892　長野県千曲市大字戸倉2388番地

電話（026）275－0004

印　刷　信毎書籍印刷株式会社

〒381-0037　長野市西和田1－30－3

電話（026）243－2105